

断面新聞

オーアールエフ、なう。



慶應義塾大学
環境情報学部
加藤文俊研究室
【非売品】

ORF二日目も順調

六本木アカデミーヒルズで開催中のORF2009が開催二日目を迎えた。昨日の来場者数は千四百三十人で、二日目の今日も、会場内は企業からの来場者や取材に訪れた人びとでにぎわっている。

一日目来場者は1430人



【第三号】

少し肌寒かった二日目に比べ、二日目の今日はコートの前を開けて歩くような心地よい陽気に恵まれた。ORF2009への来場者も、午後二時の時点で三百三十人あまりと、順調なすべりだ。

それぞれのブースの学生達の説明も板に付いてきた様子で、昨日より生き生きと自分たちの研究を話す姿が印象的だ。余裕も見え始めた学生に対し、準備からの疲れが見え始めているのが教員側であろう。

40階に向かうエレベーターの中で出会った田中浩也先生の口調には、いつもの覇気はなく、私の問いかけに、なんとか答えようと集中力を振り絞っている様子であった。

G05、断面新聞編集デスクも、二日目を迎え、創刊号からの反省を受け、紙面を仕上げるスピードも上がってきてはいるが、それでも編集者のひとりが入力エラーのため欠席するなど、あいかわらず現場では予期せぬトラブルも続いている。

二十二日、二十三日に発刊された創刊準備号、創刊号、二号も、G05ブースでは配布されているので、一昨日、昨日の様子を知りたい方は是非ブースに立ち寄っていただきたい。リアルタイムドキュメントは、断面新聞のほか、Twitterでもビデオが配信されている。@who_meのつぶやきをみるか、もしくはハッシュタグ#ORF2009 #G05で検索すると閲覧が可能である。

長い時間をかけ準備してきたものをたった二日に結晶化しているのがこのORFである。残る今日一日で、見たこともない輝きを各人が見つけられることを祈っている。(市川友美@tokyoicchi)

ORF二日目調査

研究発表だけじゃない！出張キャンパスとしてのOFCの実態

ORF二日目は平日である。午前中は比較的客入りが少ないと考えて、興味のある研究室の発表を見学する者も多い。歩き回っているSFC生や発表中の研究室にインタビューと追跡調査を通してSFC生の行動パターンを調べてみた。

大きく分けると傾向は4つに分かれる。

1 近隣の研究分野

最も多いのが、「物理的に近い研究室の発表を見た」というものである。自分の研究ブースでの発表に専心している学生は、僅かな時間で近くのブースを見る余裕しかないのかもしれない。基本的には近い分野別に配置されているが、「小川研から小林研」や「寛研から小川研」、「小林研から岩竹研」など近い研究分野ばかりとも言えない。「微妙な距離感」とも言うべきこの関係は、今後の研究にとって有益な刺激が多いのではないだろうか。

2 知り合いの研究分野

次点は知り合いの研究室を見に行くというものである。SFCではサークルや一年次のクラス(アドグル)で異なる研究分野の友人を持つ者も多い。このような研究と直接関係ない繋がりがから斬新な研究が生まれるのかもしれない。

3 同じ研究分野

1と近いが、分野の近い研究室を見に行くというものである。具体的な目撃事例としては、「山中研から田中研」や「飯盛研から井上研」、「安村研から岩竹研」などがある。また、これに関しては個人研究との繋がりが強く、「有澤研から清水研」など、自分の研究分野に繋げるために遠くのブースまで行く学生も多かった。

4 真逆の研究分野

また真逆の研究室という意見もあった。これは二つ目の研究室を考えるヒントとして利用しているものが多かった。



未知のテーマが一同に立ち並ぶORF。今日からがまた新しい研究の始まりなのである。(田島悠史@epitajim)

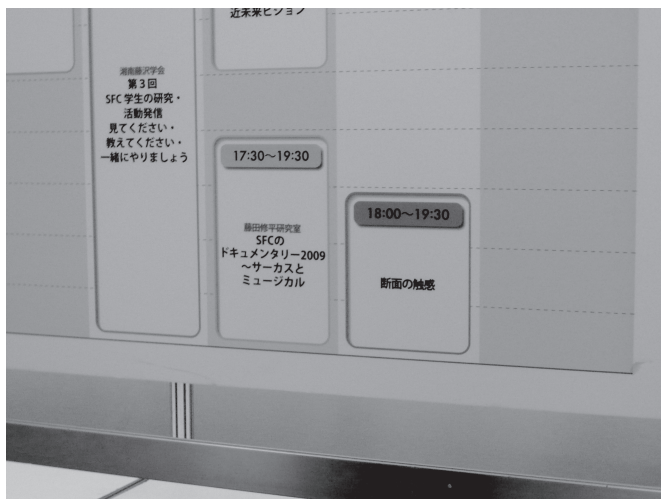


「断面の触感」

エントランス正面に、大きなディスプレイがあり、そこではORF 2009のWEBサイトと同じ画面が表示されている。学生たちはページが公開されてから、つぶやくことで、もじやもじやと生えてくる草と、当日に向けての盛り上がりや、切迫感の中で楽しんでいた。それを知っているせいも、同じページがただ表示されているのか、と素通りしてしまいがちだが、実はこのディスプレイ、会場だけの特別バージョンである。

まず、HP上だと草はただ、もじやもじやしているだけだが、会場の画面上では、草が風に吹かれたように揺らいでいることに気がつくだろう。この揺らぎ、ただ無規則に揺れているだけではない。画面の前に、たくさんのiPodtouchがあるのだが、これの揺れと、画面の草の揺れは連動しているのだ。さらに画面の表示されているスクリーンは、タッチパネルになっている。HPでは、つぶやくの草を拡大表示しか出来ないのだが、会場のものは、横にスクロールが可能だ。そして、つぶやくの草の表示のされ方も、数パターンあったことをご存じだっただろうか。現在は当日つぶやくれた分が表示されているのだが、公開されてから今日までの、その日ごとの草の生え方が見ることもできる。前日準備の日は、来場者もいなく、出展者は忙しいため、意外とつぶやくが少なかったり、ある日だけもじやもじやしているなど、過去のつぶやくを見返すのも楽しい。

草が生えている地面の部分に書かれている文章だが、これもただ文字が羅列されているわけではない。過去の残っているORFのサイトから、文章を拾ってきており、下に行くほど過去の年度のサイトに載っている文章になっている。今年、過去のORFの土壌の上に、ふとした言葉が草となって生えてきて、どのように盛り上がったかが、つぶやくとして残るといふことになる。会場のみの特別バージョンになっていることを知らなかった方は、断面の触感を確かめてみるとういだろう。(＠pokkeke)



「断面の触感」 って、なんですか？

セッションパーク2(キャラントA)にて
18:00~19:30

今年度のORF用意されている数多く存在する研究発表、その中であえて詳しい情報が明かされていないプログラムがあることをお気づきになったであろうか？そのプログラムとは本日十八時からセッションパーク2(キャラントA)で開催される「断面の触感」と名付けられているものである。

このプログラムのキーパーソンが田中浩也先生であるという情報を仕入れた私は、突撃取材を敢行した。

「このプログラムでは何をやるのでしょうか？」
「そもそも今年度ORFテーマである「断面の触感」その少し聞いただけでは、よくわからない謎のテーマについて、実行委員の方から少し解説をいただく。また、エントランスを担当した、自分がシステム周りについて語りたいと思います。」

「あえて、詳しい内容を書かなかった理由は何か？」
「登壇者を誰にするかということに決めたくなかった。その場にいる人、すべてが登壇者であるという感覚を持つて、時間を過ごしたい。なぜあのテーマがあつて、それがどのような意味を持つているのか。それをみんな考えてほしいです。」

今年度のテーマ「断面の触感」。この言葉の意味について、少しでも考えた人。考えた結果、何か思うところがあった人。逆によく理解することができなかった人。ORFの締めくくりを、この場をもって共有し、SFCという「庭」をこれからさらに成長させていって欲しいと思う。(＠36513)